

シンプルな肥育技術を徹底するだけで 優秀な枝肉成績を維持

肥育成績向上のポイントとは、①飼料摂取量を安定的に高く維持、②適切なビタミンAコントロール、③ストレスの少ない飼養管理の三つ。肥育期における飼料の食い込みとビタミンAコントロールの両立を意識し、優秀な枝肉成績を維持している農場の取り組みを紹介する。

全国平均を上回る枝肉成績

同農場は8カ月齢未満の交雑種去勢素牛を北海道の市場から導入し、約28カ月齢で出荷する肥育農場だ。表1のとおり平成21年度からの約3年間、3等級以上率は約80%と全国平均より30%近く高い。さらに4等級以上率は年々上昇しており、23年度は40%に到達している。

シンプルな肥育技術を忠実に実施

同農場はくみあい飼料の指導のもと、シンプルな肥育技術を忠実に実

施している。主な具体的実施事項は以下の三つである。

① 導入牛への対応

素牛導入後2カ月間は、チモシーと稲WCS（稲発酵粗飼料）をしっかりと食い込ませて腹づくりを徹底。特に稲WCSは嗜好性が高く、5kg近く食い込む牛もいる。また、この期間の配合飼料には*モネンシン添加飼料を給与。道内の育成農場はモネンシンを添加する例が多く、移動と飼料変更によるストレスを重ねないようにし、下痢の抑制に努めている。肥育前期は全頭並べる飼槽幅に

し（写真1）、ゆったりとした（1頭当たり約6㎡）牛舎設計にしている。

② 稲ワラの使い方

稲ワラは全肥育期間、いつでも食べるように飽食にし、牛が自ら量を調整できるようにしている。牛房の飼槽の反対側にも稲ワラを積んでおき、飼槽に稲ワラがなくなった場合でも、牛が食えない事態が発生しないように徹底している（写真2）。

③ 暑熱対策の徹底

暑い夏場には必ず食い込みが落ちて生産性を落とすため、牛舎への断熱材の設置と換気扇の増設を行った。断熱材は新しい牛舎を建設する際に取りつけた（写真3）。これにより、旧牛舎と比較して3℃程度牛舎内の温度が低く保たれている。また、1牛房1個だった換気扇を2個

に増設し、風を牛体にあて体温を下げていく（写真4）。さらに飼料タンクに暑熱シートをかけ、タンク内部の温度上昇を抑え、飼料の品質劣化を抑制している（写真5）。

ビタミンAコントロールの見直し

そのほか、ビタミンAコントロールについては、過去の血液検査から血中ビタミンA濃度を落とす時期が遅れていた（図1）ことが判明。ビタミンA無添加の飼料に早めに切り替えるなど給与体系を調整し、肥育成績を向上させることに成功した。今後はビタミンAの定期的な補給（予防）と牛の状態を見ながらのビタミンAスポット投与（治療）の両面を徹底し、高い成績を維持しながら事故と瑕疵の抑制も実現していく。

表1：過去3カ年の枝肉成績

	枝肉重量 (kg)	3等級以上率 (%)	4等級以上率 (%)	ロース芯面積 (cm ²)	バラの厚さ (cm)
平成21年度	522	76.8	28.0	52.5	7.7
平成22年度	523	83.3	30.8	53.6	7.6
平成23年度 (4-12)	524	79.4	41.3	54.4	7.7
交雑種去勢全国平均	496	52.3	10.3	50.1	7.2

*全国平均は(社)日本食肉格付協会の平成22年度牛枝肉格付情報を活用

十分な飼料給与



写真1：十分な飼槽幅

Point!

飼料給与時に並ばずに後ろにいる牛は調子が悪い！



写真2：牛房飼槽の反対側にも稲ワラを給与する

徹底した暑熱対策



写真3：断熱材の設置



写真4：換気扇の増設



写真5：暑熱シートの設置

図1：過去の血中ビタミンA濃度の検査結果

